



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	I. A. ゴンチャローフと二人の日本人
Author(s)	沢田, 和彦
Citation	スラヴ研究, 45, 79-100
Issue Date	1998-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40172
Type	departmental bulletin paper
File Information	45_79-100.pdf



I.A. ゴンチャロフと二人の日本人

沢 田 和 彦

はじめに

周知のように、ゴンチャロフは日本と関わりの深いロシア作家である。彼は、1853（嘉永6）年に日本の鎖国を開放する使命を帯びたロシアの第三回遣日使節 E.V. プチャーチン提督の秘書官として長崎に来航したし、また小説『断崖』は、日本近代文学の嚆矢とされる二葉亭四迷の小説『浮雲』に多大の影響を及ぼした。だがペテルブルグでの作家と日本人たちの交渉についてはあまり知られていない。本稿ではゴンチャロフと確実に交渉のあった二人の日本人を取り上げる。

1. 市川文吉のロシア行

市川文吉は1847年8月3日^①、蕃書調所^②教授職市川兼恭^③（1818-1899）の長子として江戸に生まれた。文吉は1860（万延元）年、13歳の時に蕃書調所でフランス語学習の命を受けてこれを学び始め、1864（元治元）年には開成所の教授手伝並当分助に任ぜられた。

1865（慶応元）年、幕府が本邦初のプロのロシア語通詞志賀親朋と箱館駐在の露国領事 I.A. ゴシケーヴィチの勧請を容れて、初めてロシアへ留学生を派遣することになった。留学期間は5年の予定で、ゴシケーヴィチは日本政府からの借金を、留学生のロシア滞在経費と相殺しようとしたのである。市川文吉は、従来ロシアとロシア語に深い関心を持っていた父兼恭の推薦によって留学生に選ばれた。兼恭は当時開成所で次席の地位を占める教授で、幕末ドイツ学の第一人者だった。当時の開成所の学科目は次のとおりである。

和蘭学、英吉利学、仏蘭西学、独乙学、魯西亜学、天文学、地理学、窮理学〔物理学－沢田〕、数学、物産学、精煉学、器械学、画学、活字^④

しかしながら「魯西亜学」の教員はまだいなかった。兼恭は息子をその教員にしようとしたのだろう。文吉はこの時18歳、開成所仏学稽古人世話心得の身分だった。

他に選ばれたのは幕臣の子弟で開成所の生徒4名、緒方城次郎（英学稽古人世話心得、21歳）、大築彦五郎（独乙学稽古人世話心得、15歳）、田中次郎（14歳）、小沢清次郎（蘭学稽古人世話心得、12歳）と、箱館奉行支配調役並の山内作左衛門（29歳）である。志賀の留学は出発直前に取り消しとなった^⑤。家格の高い市川が一行の組頭になったが、留学生取締役には年長の山内が任命された。この不自然な人事が、後にロシアでの市川と山内の対立を引き起こすこととなる。

市川の壮行会が下谷の「松本屋」で催され、そこには開成所の教授職31名が出席し、芸者100名が侍ったという。父の兼恭は開成所の同僚や部下に、息子に対する壮行文を依頼し

た。これが『幕末洋学者欧文集』^⑥である。執筆者は計35人。内訳は蘭文18人、独文5人、仏文4人、英文8人である。送別文の大半の主旨は、父祖の国日本の洪恩を忘れず、学業に精を出し、健康に留意せよ、といったものである。兼恭は「越後屋」呉服店（後の「三越」百貨店）で文吉に燕尾服風の洋服をあつらえてやり、洋学者柳河春^{しゅんさん}三宅で家族全員の記念写真を撮った。

さて留学生一行は箱館に集合し、1865年9月16日（陰暦7月27日）にロシアの軍艦「ボカテル」^⑦号で箱館を出帆した。長崎、香港、シンガポール、パタビア（現ジャカルタ）、ケープタウン、セント・ヘレナ、イギリスのプリマス経由で、フランスのシェルブールに上陸した。この間彼らは慣れない洋食、艦の揺れと船酔い、焼け付くような暑さと寒気、便秘に苦しめられた。プリマスで初めて劇場やホテルといった西洋文明の粋にふれた。シェルブールからは汽車でパリ、ベルリンを経由し、翌1866年4月1日（陰暦慶応2年2月16日）にペテルブルグに到着した。都合214日の旅だった。

2. 遣露留学生の顛末

到着2日後に留学生たちはロシア外務省アジア局に出頭し、そこで橘耕斎という日本人に引き合わされた。周知のように、1854年にプチャーチン提督が下田に來航した時、ディアーナ号は津波で損傷を受けて沈没してしまったので、戸田村でロシア人は日本人の協力のもとにスクナー船「戸田」号を建造して、プチャーチンはこれに乗って帰国した。この折り橘は、ゴシケーヴィチらとともにプロシアの商船グレッタ号で日本を密出国した。後にゴシケーヴィチは橘の協力のもとに『和魯通言比考』（1857年）を編纂した。橘はロシア名を「ウラヂーミル・ヨシフォヴィチ・ヤマートフ」^⑧と名乗り、ゴシケーヴィチの推挙でアジア局に九等官通訳として就職した。1870年にはペテルブルグ大学東洋語学部^⑨の初代日本語講師となった。彼は1874年に日本に戻ったが、帰国に際して在露18年間の功業に報いるためスタニスラフ三等勲章と年金1000ルーブルをロシア皇帝より下賜された。橘がゴンチャロフと知己を結んでいた可能性は高いが、それを裏づける資料は今のところ発見されていない。

さて留学生はゴシケーヴィチや橘、そしてペテルブルグ大学東洋語学部長で中国学者ワシーリエフ教授の尽力でロシア語を学んだ。彼らは露都到着4日後から借家で女中二人と下男一人を雇って共同生活を送っていた^⑩。山内の両親宛の手紙に、「吾等の家は川〔ネヴァ川－沢田〕より西にして川東に帝宮あり」^⑪とあるので、借家はワシーリエフスキ島にあったのだろう。そこにゴシケーヴィチがやって来てロシア語を教えてくれた。ゴシケーヴィチは知人宛の手紙にこう書いている。

毎朝9時から12時まで（すくなくとも11時30分まで）きちんと授業しています。みんな熱心に勉強しており、一人だけのぞいてみんな才能のある青年たちです。この冬までにはみんなロシア語がわかるように教えこみ、あとは新しい先生がたに引き継ぎたいと思っています^⑫。

だがゴシケーヴィチの来訪は非定期的で、教え方も非体系的だった。山内の手紙にこうある。

右之人〔ゴシケーヴィチー沢田〕を師にいたし学ひ居候所、中々稽古にも相越不申、〈中略〉コシケウキチもよろしく候へ共、なにこともとんちやく致さぬ人故、学問筋もよく嚴重にをしへ申所には至不申候、依てこまり入申候⁽¹²⁾。

ゴシケーヴィチの面倒見はあまりよくなかったようだ。また橘もロシア語の先生としては力不足だった。山内は橘の語学力について手紙にこう書いている。

魯学は不学のよし出来不申候、しかし十年も居り候間言葉数を多く覚え居、とうやらこうやら通弁いたし居申候よし⁽¹³⁾

露都到着 1 カ月後に、和服を着、腰に大小をたばねた姿で撮影した留学生たちの写真が残っている。取締り役の山内はその余白にロシア文で決意のほどを認めた。

Где недостает простых сил, там пробегают(sic) к искусству(sic), когда немогут(sic) осуществать(sic) чего(sic) в ближайшее время, то непускают(sic) из виду в будущей дали, вот в чем заключается превосходство запада, вот что должны страсться(sic) усвоить иностранцы.

Россия и соседнее и дружественное наше(sic) государство, можно ли нечувствовать(sic) ее влияния! Но Япония, хотя с сотворения мира и прошло более десяти тысяч(sic) лет, в первый раз посылает седа(sic) своих учеников. При таких милостях, имеющих вес горы, что можем мы сделать с нашим телом легким, как лист - остается толко(sic) в стыде о своей неспособности, выразить это набумаге(sic).

1866 года, Японского Государа(sic) Кеиоо 2-й годе(sic) правления в 3-й луне в Русской столице Петербурге Японец Ямауци с почтеньем сделать(sic) эту подпись(sic).

ウラヂヴォストークの極東大学日本語科教授スパルヴィンによる和訳を次に示す。

普通の力にて足らざる場合には技術を以てす。今実行為し難き事は遠い将来にまで注意を中止せず。之が西洋の卓越せる点なり。異国人は之を学ぶべく努力せざるべからず。

ロシアは我々の隣国にして、また親善国なり。その影響を受けざるべけんや。

然るに日本は世界の開闢以来既に一万有余年を経たるにも拘わらず、その生徒を此処に派遣せるは今始めてなり。

泰山の如き恩恵に対し木葉の如き軽き身を以て何を為しえんや。只己が無能を恥ちて之を紙面に



ロシア留学生一行
(内藤達『幕末ロシア留学記』雄山閣、1968年、口絵より)

記すのみ。

一千八百六十六年、日本の慶応帝の治世二年三月、ロシアの都ペテルブルクに於て日本人山内この書を謹みて認む⁽¹⁴⁾。

スパルヴィンによると、このロシア文は16箇所の文法的誤りが認められるものの、当時の諸事情を勘案すればよく書けているという。山内は日本出発前に箱館でロシア語を少し学んでいたし、ロシアで一番よく勉強したのも彼だった。従ってこの文章は、この時点での留学生たちのロシア語力を推し量るひとつの目処となる。他の5人は恐らくこれ以上の力は身に付けておらず、ロシア文法の難解さに辟易していたものと思われる。山内は両親宛の手紙にこう書いている。

ことに魯はからんまちかと申もの、外国よりはよほとむつかしく候<中略>当地に相越既に一年に候へ共、中々十分に口も通し不申、学問進み方至て遅く…⁽¹⁵⁾

薩摩藩士で後に明治政府の初代文部大臣になる森有^{ありのり}礼が当時英国留学中だったが、彼は同じ薩摩藩士の松村淳蔵とともに1866年夏に11日間ペテルブルグを訪問し、幕府の留学生たちとも親しく交わった。森もその日記『航魯紀行』にこう記している。

魯国之国語ハ欧羅巴ニおひて学ふニ最も六ヶ敷と聞けり、尤文典の動詞の変化や形様詞等至而混雑と、幕生緒方（此人和蘭と英とを先達而学へり）といふ人の話也⁽¹⁶⁾

その後留学生は各自専修したい学科目を選定した。田中、市川は鉱山学、小沢は器械学、大築は医術、緒方は精密術を選び、山内は大学で歴史、窮理、地理、文法、法度などを学ぶことにした⁽¹⁷⁾。1868年、即ち彼らがペテルブルグに来て3年目に、ロシアの雑誌『現代の記録』第3号に「ロシアの寄宿学校で学ぶ日本人たち」と題する次のような記事が掲載された。

『ロシア報知』のペテルブルグ通信員が伝えるところによれば、ペテルブルグのツェロフスキイ男子寄宿学校で5人の日本人が注目を集めている。彼らはきわめて高貴な家柄の出で、もう3年間この学校で学んでいる。彼らの最年長は22歳で、この人物は妻帯しているが、妻は日本にいる。彼らは全員賄い付きの下宿生活で、生活費と聴講料として各自1500ルーブルずつを支払っている。通信員の言葉によれば、3年間に日本人たちはめざましい進歩を遂げて、もうきわめて自由にロシア語で意思の疎通ができ、諸科学への高度の適応能力を発揮している。彼らはとりわけ博物学のすべての分野に関わる科目を好んでいる。彼らはわがロシアの専門教育施設に入学するための準備中である。彼らのうちのある者は外科医学専門学校、ある者は鉱山大学、またある者は交通路技師専門学校、というように⁽¹⁸⁾。

この記事から、留学生たちが賄い付きの寄宿学校に入っていたこと、そこで各自目標をもって熱心に勉強し、ロシア語も上達していたことが分かる。人数が5人とあるのは山内がこの時点で既に帰国していたからであり、妻帯者とは緒方城次郎のことだろう。鉱山大学入

学を目指していたのが市川である。

しかしながら、留学生の努力は実を結ばず、ロシアの大学、専門学校入学の夢はとどのつまり実現しなかった。その理由としては、第一に彼らの多くがロシアという国に失望したからである。山内は手紙のなかで、「都は江口三分の一たらずに可有之候、中々英仏両国之繁栄には及び不申すへて汚穢に有之候」、住民は愚鈍怠惰、「よほと外歐羅巴人に比し候へはするく実田舎ものに候」と極言し、「風雪凝凍更に春色も無之土地に遷滴いたし、一同あきれはて居申候」と書いている。また学生の風紀廃頹に関しては、「初る日頃よりみな学校之方に稽古に相越させて学校中入仕候はよろしく候へ共、学校中稽古人みなあしく候間よき事は覚え申間敷、旁々学校之師之傍に栖居候方よろしからんとの事に御座候。いまて日合も有之決意不仕候。」⁽¹⁹⁾と述べている。森も『航魯紀行』で、ロシアがヨーロッパの後進国であることを指摘し、ロシア語の学習が困難にもかかわらずその効用が少ないため、「幕生衆も魯渡の事を甚だ悔めり」⁽²⁰⁾と書いている。山内は既に帰国前に、「帰国の上はいつれ早々英学にて相始申度」⁽²¹⁾と両親に打ち明けているほどだ。

また一行の半数は年齢が若すぎたこと、前述のような留学生同士の不和を引き起こす人選の拙さ、講義を聴いて理解するほどロシア語の力がついていなかったことも理由に挙げられよう。森の『航魯紀行』に、「市川、緒方ハ以上〔御目見以上－沢田〕の格とぞ、山之内氏ハ以下なれとも齢も長し、学文もあつて、諸事両士より遥ニ勝きらん、餘は乳児也」⁽²²⁾とある。山内によれば、小沢、田中の二人は「日本国」の字も読めなかったという⁽²³⁾。1867年3月に山内が病気を理由に帰国し、次いで徳川幕府の倒壊とともに1868（明治元）年5月に4名が帰国した。かくしてロシアへの留学生派遣はほとんど実を結ぶことはなかった。

3. 市川のペテルブルグ滞在

だが市川文吉だけは単身ペテルブルグに残留し、プチャーチンのもとに引き取られた⁽²⁴⁾。住所はキーロチナヤ通り（現サルティコフ＝シチェドリネ通り）18番地である⁽²⁵⁾。プチャーチンは1855年の日露通好条約締結の功績により伯爵に叙せられ、次いで1861年6月には文相に任ぜられた。だが厳しい文教政策をとったために大規模な大学紛争を惹起し、半年後には辞任のやむなきに至った⁽²⁶⁾。当時は比較的閑暇な生活を送っていた時期である。

市川がプチャーチン宅に仮寓するにいたった理由は明らかではないが、プチャーチンは市川の父兼恭と面識があった。1853年のロシア使節長崎来航の折りに天文台蕃書和解御用⁽²⁷⁾出役だった兼恭は、江戸でプチャーチンの書簡をオランダ語から翻訳した⁽²⁸⁾。この書簡はロシア使節が長崎で日本の応接掛に提出したもので、交渉で約束した樺太境界検分のため出張する幕



市川文吉
（内藤達『幕末ロシア留学記』雄山閣
1968年、口絵より）

吏の取り扱いを、あらかじめ同地駐屯の露国守備隊長に指令したものである。これは高須松亭、高松讓菴との共訳である⁽²⁹⁾。また1858年にプチャーチンが日露通商条約締結のためアスコリド号で神奈川に來航した時には、兼恭は翻訳係として繰り返しその乗艦を訪問して提督と顔なじみになり、彼から染皮二枚を贈られたのである⁽³⁰⁾。このような関係が、プチャーチンをして日本の知人の長男を庇護させることになったのだろう。周知のように、川路聖謨^{としあきら}は日本側全権員の一人として長崎でプチャーチンと交渉し、『フリゲート艦パルラダ号』にも度々登場するが、その孫にあたる川路太郎が当時イギリスに留学中だった。彼はその『滯英日記』にこう書いている。

慶応三年正月二十日〔新暦1867年2月24日－沢田〕、曇甚冷。頃日露西亜よりの書状を一覧するに、日本よりの留学生之の内市川某と申者はプチャーチンの家に遇宿して彼誠によく世話をなしたる由なり。他日我輩学校の休日に魯西亜に赴き、プチャーチンの家を訪ひ、昔年老大人〔川路聖謨のこと－沢田〕の彼れと熱熟親をなせることを告げんことを望む⁽³¹⁾

この時イギリスには川路太郎とともに市川文吉の弟盛三郎も留学していた。盛三郎は後に明治日本の物理学・化学の指導者となる。彼は留学中に一度ロシアの兄のもとを訪ねた⁽³²⁾。

さて市川文吉は露都でゴンチャロフ外3名からロシア語、歴史、数学を学んだ⁽³³⁾。市川を作家に引き合わせたのはプチャーチン、あるいはゴシケーヴィチあたりか。ちなみに父兼恭を通じて文吉にロシア語学習を勧めたのは、前開成所頭取の古賀謹一郎である。1853年のプチャーチン來航時に、当代随一の儒学者古賀は日本側全権員の一人として長崎でロシア使節団と対面した。彼も『フリゲート艦パルラダ号』に登場する。

四番目は中年男で、まるでシャベルのように無表情な平々凡々とした顔の持主であつた。こうした顔を見ていると、彼が、日常茶飯事以外にはあまり物を考えないことが、すぐさま読みとれる⁽³⁴⁾。

一方古賀もその日記中でゴンチャロフの印象を、「大腹夷名良茶呂、謀主也、腹大以呼」⁽³⁵⁾と書き留めている。このあたりに歴史の見えない糸が感じられる。市川とゴンチャロフの交遊は、ゴンチャロフが20年をかけて書き上げた長編小説『断崖』が批評界で不評を買い、作家が絶望に陥って一時は文筆を捨てようとした時期に当たる。ロシア作家と日本人留学生ははたしてどのような会話を交わしたのだろうか。

市川はロシアの上流社会にも出入りした。彼は山内とは逆に親露感を抱いていた。それには彼のフランス語の知識も一役買ったことだろう。市川はその後恐らくプチャーチン宅を出て、ロシア人女性「シユヴキロフ」⁽³⁶⁾と



ロシア人女性「シユヴキロフ」
(宮永孝『幕末おろしや留学生』
筑摩書房、1991年、229頁より)

同棲し、1870年に男子をもうけた。この子供アレクサンドル・ワシーリエヴィチ・シユヴキロフ（シェヴィリョーフ）は後に外交官になり、アフガニスタンもしくはペルシャ方面の総領事をつとめた⁽³⁷⁾。1869年8月に市川は、加藤弘之の尽力により明治新政府の外務省留学生の身分を獲得した。加藤は市川の父兼恭の蕃書調所時代以来の同僚で、兼恭の養女をめとっていた。後の東京帝国大学総長、帝国学士院院長である。1870年の年末に西徳二郎と小野寺魯一^{ろいち}が留学生としてペテルブルグにやってきた。市川は橘とともに二人の面倒を見てやった⁽³⁸⁾。

4. 市川の帰国と後半生

1873年3月末に明治政府の岩倉具視^{ともみ}遣欧使節団がペテルブルグを訪れた。4月1日付で市川は使節団の随員に加えられ、使節のアレクサンドル二世謁見の折りの通訳をつとめた⁽³⁹⁾。そしてこの年の9月13日に市川は使節団とともに8年2カ月ぶりに帰国した⁽⁴⁰⁾。約8年間ロシアに滞在したことになる。シユヴキロフ（シェヴィリョーフ）母子との別れを、後に『東京日日新聞』は思い入れたつぷりにこう描写している。

雪の降る夜ストーブの前で、愛する女と、愛する児のためにその金髪を撫で、再会の日を約して互に終夜を泣き明かした⁽⁴¹⁾

帰国の翌月、市川は文部省七等出仕となり、12月に4カ月前に開設されたばかりの東京外国語学校魯語科教員に任ぜられた⁽⁴²⁾。これで彼は所期の目的、少なくとも周囲の人々のそれを達したことになる。この年に市川は遠縁の娘と結婚し、後に二女をもうけた。翌1874年2月に外務省二等書記官に任命され、翌月海軍中将兼特命全権公使榎本武揚に随行してペテルブルグへ赴任した⁽⁴³⁾。露都の日本公使館はネヴァ河岸のピビコフの大邸宅を借りたもので、在勤員は6人。このうち榎本以下5人がここに同居していた⁽⁴⁴⁾。市川の主な仕事は、会談の際の通訳や外交文書の翻訳だった。とりわけ千島樺太交換条約の交渉に与っては、志賀親朋、西徳二郎とともに通訳として大いに力を発揮し、この条約は1875年5月7日（ロシア暦4月25日）に調印された。この折り彼は条約の参考資料として、ポロンスキーの『千島列島』（1871年）を日本語に翻訳した⁽⁴⁵⁾。この間シユヴキロフ（シェヴィリョーフ）母子とは何らかの交渉があったものと思われる。1878年7月から9月にかけて、帰国の際に市川は榎本らとともに4頭立てのタランタス（4輪有蓋の旅行用馬車）2台でペテルブルグからウラチヴォストークまで1万500キロメートルのシベリア横断旅行を66日間で敢行した⁽⁴⁶⁾。

翌1879年1月に市川は外務省御用掛兼文部省御用掛となり、再び東京外国語学校魯語科で教鞭を執った⁽⁴⁷⁾。その生徒たちのなかに嵯峨の屋お室（本名矢崎鎮四郎）や二葉亭四迷（長谷川辰之助）がいた。そしてこの、ゴンチャロフの「孫弟子」二葉亭が、わが国最初のゴンチャロフ文学の紹介者となつたのである。奇しき縁といえよう。二葉亭の愛読書のひとつは『断崖』だったから⁽⁴⁸⁾、彼は市川からゴンチャロフのことを聞いていたにちがいない。但し前記鈴木要三郎の回想によると、市川は長期ロシア滞在のため日本語がよくできず、ロシア語の方も単語を知っているばかりで、学術的素養というものは持ち合わせていな

かった。例えばゴンチャローフと交際しながら、『オブローモフ』を読んだことはなかったという⁽⁴⁹⁾。榎本も市川を高く買っただけではなかった。妻への手紙で榎本が駐露公使の後任について述べたぐだりにこうある。

市川はロシア語は勿論仏語も下(ママ) 通りは出来れども、結構人にて学問も見識もなく、其上日本文字がまるで出来ず(余り長クナルカラ此話ハヨシニ致シマショー)⁽⁵⁰⁾

但し市川のために一言弁明すると、当時の「学術的素養」、「学問」とは即ち漢学を意味した。一方彼の学歴を見る限り、父親が西洋指向型だった影響もあるのだろう、漢学はあまり勉強しなかったようだ。この点は差し引いて考えてやらねばなるまい。

1879年に父兼恭は文吉に財産を、翌年には家督を譲った⁽⁵¹⁾。1885年に東京外国語学校が廃止になると、翌年6月、黒田清隆のシベリア経由欧米巡遊に市川は非職外務省御用掛の身分で随行し⁽⁵²⁾、露都でのアレクサンドル三世との会見に通訳の役目を果たした。1887年4月に帰国。この年に文部省編纂局が『露和字彙』を刊行した。活字になったわが国最初のロシア語辞典である。上・下巻合わせて2878頁、語彙数は十数万語という巨大なものだが、これに市川は編者のひとりとして参加した⁽⁵³⁾。

その後市川は、黒田、榎本など顯官に知己が多かったにもかかわらず、官途への望みを一切絶って、熱海、鎌倉、小田原、次いで伊東で後半生の40年ちかい歳月を隠遁のうちに送った。幕臣である市川は、明治新政府の高官たちに対して口に云えない憤りと蔑みの念を抱いていたのかもしれないし、また19世紀後半のペテルブルグの社交界を垣間見てきた彼には、明治の日本など立身出世に値しない社会と映ったのかもしれない⁽⁵⁴⁾。市川の妹はこう述懐している。

文吉は父齋宮〔兼恭の通称－沢田〕に輪をかけたやうな無口で非社交的な変人で、家族のものともあまり打ち解けて話をするやうなこともなく、外国へ行く時でも当日まで何もしないでゐて、トランク一つ持つて隣町へでも行くやうに無雑作に出かけた⁽⁵⁵⁾。

ロシアに残してきた「妻」はまもなく亡くなったようだが、息子アレクサンドルには仕送りを続けた。アレクサンドルは1914(大正3)年頃と、市川が亡くなる一月前の二度来日して父に面会した。市川の喜びが筆舌に尽くしがたいものだったことは想像に難くない。また1887年にプチャーチンの長女で皇后付女官オリガが病氣療養のため来日した際は、市川は東京神田三崎町1丁目12番地の自分の屋敷内に二階家を建てて、そこに住ませた⁽⁵⁶⁾。晩年は、帰国した橘耕斎や東京外国語学校の元教師アンドレイ・コレンコとは親密に交際し、彼らの不遇な晩年の生活に対して種々の援助を惜しなかつた。またロシア革命後は銀座街頭で亡命ロシア人に金品を恵み与えていたという⁽⁵⁷⁾。市川文吉は1927(昭和2)年7月30日に死去した。享年81歳。墓碑は東京都内の雑司ヶ谷霊園にある。ロシア滞在時に購入したと思しき彼のロシア語蔵書は、1924年に東京外国語学校に寄贈され、現在も東京外国語大学図書館に保管されている。

5. ゴンチャロフの未刊行書簡

ロシアの代表的なゴンチャロフ研究者のひとりである国立ウリヤーノフスク工科大学教授メーリニク氏は、1984年に論文「忘れ得ぬ『パルラダ』号」⁽⁵⁸⁾を発表した。その後半部分は、長崎でのゴンチャロフと川路聖謨の交わり、日出づる国への作家の尽きざる関心、そして彼と交流のあった可能性のある日本人の記述に捧げられている。そこでメーリニク氏は1887年8月14日付のA.F. コーニ宛のゴンチャロフの未刊の手紙⁽⁵⁹⁾を紹介し、「アンドウ」なる日本人が作家と交流があった事実をつきとめている。これは一つの発見である。

アナトーリイ・フョードロヴィチ・コーニ（1844 - 1927）は著名な法律家、社会活動家、法制審議会会員、アカデミー名誉会員（1900年より）であり、文学者でもあって、19世紀のロシア作家について数多くの回想録を著した。1871年以来ゴンチャロフが亡くなるまで、彼のもっとも親しい知己のひとりであって、作家はコーニを遺言執行者に指定しているほどだ⁽⁶⁰⁾。二人は32歳という年齢差にもかかわらず、ともにロシア・リベラリズムの典型的な代表者であり、アレクサンドル二世の改革の心からの信奉者だった⁽⁶¹⁾。コーニの5巻本の回想記『人生の途上にて』には、晩年のゴンチャロフに関する詳しく、興味深い回想が含まれている。そこでは作家の創作の主観性、彼の極度に神経質な性格、人ざらい、ツルゲーネフとの剽窃問題に代表される猜疑心の強さが見事に浮き彫りにされている。コーニを文学活動の舞台に導き入れたのは、ほかならぬゴンチャロフだった。

「プーシキン館」のゴンチャロフ・グループの前秘書ロマーノフ女史が、この手紙の写しを送付してくださったので、以下にそれを訳出する。作家が夏の休暇をとっていたグンゲルブルグ（ウスチ＝ナルワ）から書き送ったものである。

日本人公使ならば、わが国に来た者は全員存じております。うち一人は、そのご夫人とも知り合いになりました。これはすべてポシェート家でのことです。公使館員の一人に、優美流暢に、洗練されたロシア語をしゃべるアンドウ＝サン（わが国風に言えば、ゴスポチン・アンドウ）という人がいますが、彼が向こう一年帰国する際、邦訳を出すため『フリゲート艦パルラダ号』を持ち帰っています。もちろん、私は日本人と近づきになりたく、喜んであなたの所へおうかがいいたします⁽⁶²⁾。

若干補足説明を加えると、まずポシェートは、1853年にプチャーチン提督付副官兼オランダ語通訳官として長崎に来航した海軍少佐で、後に運輸大臣や参議院議員を歴任した人物である。

グンゲルブルグ即ちウスチ＝ナルワは、エストリヤンド県ヴェゼンベルグ郡の、チュード湖から流れ出たナルワ川がフィンランド湾に流れ込むその左岸に位置する保養地である。砂丘の松林に建った別荘が数多くあり、夏にはペテルブルグの住民が多数押し寄せた⁽⁶³⁾。今世紀初めのデータで、住人は約3000人だが、夏期には1万人を超えたという⁽⁶⁴⁾。現エストニア共和国領にある。

この時ゴンチャロフは75歳で、亡くなった使用人トレイグートの妻と子供たちと一緒に暮らしていた。ゴンチャロフが滞在していた別荘は、家財道具一式付きの条件で300ルーブルで借用したものである。彼は1887年6月5日にこの地に来て8月21日まで滞在し⁽⁶⁵⁾、ス

ケッチ『昔の召使いたち』の続きと回想記『故郷にて』の執筆に取り組んだ。コーニもまもなくここに来て、8月10日まで作家と一緒に過ごした⁽⁶⁶⁾。従って上に引いた作家の手紙は、若い親友が去った4日後に書かれたことになる。コーニの回想によれば、「陰気な人ざらい」のゴンチャロフも、自分と二人きりか、もっとも近い人々の小人数の集まりの場では活気づいたという。

リガの浜辺やウスチ＝ナロワの海岸を長時間散歩した時などがそうで、そんな時には彼「ゴンチャロフ＝沢田」の鮮明な思い出話や物語に道連れは疲労を忘れてしまうのだった。こういった思い出話のなかには、『フリゲート艦パルラダ号』に収められなかった多くのものがあつた⁽⁶⁷⁾。

上引書簡は、そのような散歩中の作家の思い出話の続きかもしれない。

さてまず書簡中の、「日本人公使ならば、わが国に来た者は全員存じております。」というくだりが興味深い。メーリ尼克氏も書いているように、この場合の「日本人公使」とは、1862年に樺太国境問題でペテルブルグを訪れた幕府使節竹内下野守保徳、同じ目的で1867年に露都を訪問した箱館奉行小出大和守秀実と目付石川駿河守、1873年の岩倉具視、そして榎本武揚などを意味しているのかもしれない。残念ながら、これを立証する史料はまだ見つからない。

メーリ尼克氏は論文の末尾で、「翻訳を引き受けたこのアンドウ＝サンとは何者であつたのか、また、何ゆえそれを果たせなかつたのか」⁽⁶⁸⁾と問いかけている。以下がこの問いに対する筆者の返答である。

6. 安藤謙介のロシア滞在

「アンドウ＝サン」、即ち安藤謙介は1854年1月1日に土佐国安芸郡羽根村に土佐藩士の長男として生まれた。彼は1869年から藩の漢学塾「致道館」^{ちどう}で学び、講師兼塾頭をつとめた。1872年に上京したが職を得られず、日本ハリストス正教会神学校に入学し、ロシア語を学び始めた⁽⁶⁹⁾。まもなく東京外国語学校魯語科の外国教諭トラクテンベルグが、魯語科の生徒が少数のため神学校の生徒を分けてくれるよう頼んできたので、1874年9月に安藤は約40人の生徒とともに東京外国語学校に移った。外語のクラスは上等6級、下等6級に分かれており、彼は下等第二級に入つて、メーチニコフなどからロシア語を学んだ。だが早くも翌年に安藤は同校をやめた。教科書として使っていた代数の原書が学校に二冊しかなく、しかもそのうち一冊は教師用だから生徒に貸し出せないと言われて、彼は生徒総代となつて校長、幹事と対立し、文部省を訪問中に放校となつたのである⁽⁷⁰⁾。この時市川文吉はロシア滞在中で、外語では安藤とはすれ違いに終わった。その後安藤は同郷の中江兆民のもとでフランス語を学んだ⁽⁷¹⁾。

この頃安藤は勝海舟と知り合った。これは安藤の生涯において大きな意味を持つ。『海舟日記』の1875年から1892年までの17年間に安藤の名は、筆者の計算によれば都合89回登場し⁽⁷²⁾、また勝の『会計荒増』にも5回言及がある。市川文吉が榎本武揚派だとすれば、安藤は勝派といえようか。『海舟日記』に安藤の名が初めて現れるのは1875年10月20日のこ

とで、「高知県平民、安藤謙介。」⁽⁷³⁾ とある。恐らくこの日初めて安藤は勝のもとに伺候したのだろう。翌1876年初めに安藤は勝に就職の斡旋を依頼し、勝はそれに応えている⁽⁷⁴⁾。そのかいあって同年4月に安藤は外務省に出仕し、サハリンのコルサコフ領事館に書記一等見習として勤務することとなった⁽⁷⁵⁾。勝の4月29日の日記に、「安藤謙介、カラフト詰め一等書記官見習い拝命の礼申し聞く。」⁽⁷⁶⁾ とある。

1878年には同じく書記一等見習としてペテルブルグ公使館勤務に転じた。安藤のロシア行きの話が勝の日記に初めて出てくるのは前年11月26日のことで、それが正式に決定したのは1878年2月のことのようにだ⁽⁷⁷⁾。1880年の『官員録』に安藤の身分は「三等書記生」、1883年のそれには「書記生」、1886年の『職員録（甲）』には「属 判任官二等」と記されている⁽⁷⁸⁾。彼は勤務のかたわらペテルブルグ大学で聴講生として行政学と法学を学んだ。ロシア語は確かによくできたようで、『帝室ペテルブルグ大学教授・教官伝記事典 1869 - 1894年』第一巻にも次のようにあり、前引のゴンチャロフの言葉を裏書きしている。

彼〔安藤 - 沢田〕はロシア語を見事に習得しており、まったくもって自由に、優美といつていいくらいにロシア語で話し、書いた⁽⁷⁹⁾。

その後日本公使館の定員削減のため、安藤は一時公使館を解雇された。これは、上記履歴からして1881 - 1882年頃のことか。だが彼は帰国せずに法学を学び続けた。ゴンチャロフが名だたる法律家であるコーニ宛の手紙で安藤に言及した理由の一つは、恐らく作家がこの日本人の専攻科目を知っていたからだろう。1881年から前記ワシーリエフ教授の招きで、彼は同学部で定員外教官として日本語と書道を教えた。これは橘耕斎、西徳二郎に次いで同大学の三代目の日本人講師ということになる⁽⁸⁰⁾。1883年に再び日本公使館に書記生として採用されたが、安藤はこの後1884年末まで2年間ペテルブルグ大学で無償で教鞭を執り続けた。これによりロシア帝国からスタニスラフ二等勲章を授与された。以上より安藤がゴンチャロフと交わったのは、1878年初頭から1885年初頭の帰国までの間のいずれかの時期ということになる。

彼がロシア時代にロシア語で著した業績としては、次のようなものがある。

1. Очерки Кореи по японским источникам // Морской сборник. 1882. кн. июньская. № 6. (論文「日本の資料による朝鮮概説」『海事集録』1882年6月号、第6号、75 - 91頁)
2. Очерки истории японского уголовного права и судопроизводства. Перевод с японского. Издано по распоряжению импер. японского посланника в С.-Петербурге г. Ханабуса. СПб., 1885. (翻訳『日本の刑法と訴訟手続きの歴史概説』ペテルブルグ、А.М. ヴォリフ石版印刷所、1885年、全42頁)
3. 1 лист японской хрестоматии писанный (sic) (азбукой) катаканой и тексты. (В 1-м томе китайской хрестоматии проф. В. П. Васильева). (かたかな表記の『日本語選文集』全紙1枚とテキスト (V.P. ワシーリエフ教授の『中国語選文集』第一巻に所収))⁽⁸¹⁾

1は序論、「国家機構について」、「言語、教育、宗教」、「朝鮮人の生活習慣、風俗、慣習」

の4章から成る、かなり詳しい朝鮮論である。この論考は1882年に発表されたが、これはこの年の朝鮮が政情不安定で、壬午事変が発生したことで恐らく無関係ではあるまい。2は当時在ペテルブルグ日本公使だった花房義質の命により出版されたものである。冒頭の「訳者より」によると、日本の法務省で作成されペテルブルグの日本公使館に送付された原本を、安藤がロシア語に訳出したものだという。ともに日本人が書いたとは信じられないほど正確で、自然なロシア語である。3は筆者未見。

7. 安藤の帰国後の活動

1885年2月に安藤は7年ぶりに帰朝した。同月24日の勝海舟の日記に、「安藤謙介、七ヶ年前、旅費遣わし世話いたし者なり。」とある⁽⁸²⁾。勝の安藤に対する財政的援助はこの時のみにとどまらず、これ以後も繰り返し安藤は勝から借金、もしくは第三者からの借金の立て替え、あるいは保証人を依頼している。その額は100円から千円までと多額に上っている⁽⁸³⁾。

1887年7月に勝から法務大臣芳川顕正への推挙によって、安藤は司法省の検事に転じた。出だしは名古屋控訴院詰で⁽⁸⁴⁾、次いで1890年に岐阜始審裁判所詰めとなった。翌年前橋地方裁判所検事正に進み、以後、熊本、横浜の地方裁判所検事正を歴任した。

1895年、横浜検事正時代に朝鮮王妃殺害事件が起こった。これは同年10月8日早朝、李氏朝鮮王朝の国都漢陽（現ソウル）の景福宮に日本の軍隊や大陸浪人が乱入し、高宗の王妃閔妃を殺害した事件である。日清戦争後の三国干渉をきっかけに、閔妃らが推進した排日政策の転換を狙って日本公使三浦梧楼が指揮を執り、朝鮮人のクーデターに仕立てようとしたが真相が発覚した⁽⁸⁵⁾。安藤はこの事件の調査のため朝鮮に派遣され、広島裁判所で審理を行った⁽⁸⁶⁾。結果は三浦ら全員が免訴となり、朝鮮での反日機運を激化させることとなった。

1896年4月、安藤は第二次伊藤博文内閣のもとで第五代富山県知事になり、初めて地方行政に関与することになった。彼の立場は政友会系である⁽⁸⁷⁾。一年後に非職となったが、1898年1月に第三次伊藤内閣のもとで第八代千葉県知事に就任した⁽⁸⁸⁾。憲政党内閣が成立すると、同年8月に再び非職となり、成田火災保険会社社長、植田無烟炭坑会社社長に就任した⁽⁸⁹⁾。

1902年9月に東京築地3丁目の同気倶楽部で日露協会が創立された⁽⁹⁰⁾。これは、日露戦争直前の危機的な時期に「日露両国民の意思を疎通し、其他通商貿易の発達を計るを以て目的」⁽⁹¹⁾としたものである。会頭に榎本武揚が就任し、安藤は創立委員、次いで相談役の一人になった⁽⁹²⁾。翌年の第8回衆議院議員選挙に富山県高岡市より無所属で出馬して当選。1904年3月の第9回総選挙にも立候補したが、今度は落選した⁽⁹³⁾。同年11月から安藤は第十三代愛媛県知事をつとめた。彼は県会で多数派を擁していた政友会とはかつて、県立松山病院を閉鎖し全財産を売却、その財源を三津浜築港、その他の大土木事業にあて、党勢の拡張を図ろうとした。だが築港費問題が発覚し、愛媛県政史上空前の政争史を生むこととなった⁽⁹⁴⁾。第一次西園寺内閣から立憲同志会の第二次桂内閣への交替により、1909年7月にまた



安藤謙介
(『愛媛県史 人物』愛媛県、
1989年、32頁より)

また休職となった。1910年に安藤は韓海漁業会社を創立して社長に就任した⁽⁹⁵⁾。翌年9月、第二次西園寺内閣の下で第十六代長崎県知事に返り咲く⁽⁹⁶⁾。政友会のリーダー原敬^{たかし}は、安藤の愛媛県知事時代の悪評に触れて日記にこう書いている。

安藤が左までの悪政をなしたるにも非らず又品性は決して醜汚の點なし、只辯口常に人の非難を招く次第なるも用ゆべからざる人物にあらず、故に斷然人言を排して之を登用したり⁽⁹⁷⁾

1912年12月に第三次桂内閣に替わって安藤は休職命令を受ける。1913年3月からは第十五代新潟県知事をつとめた⁽⁹⁸⁾。原敬は安藤の新潟県知事就任前日の日記にこう記している。

安藤謙介を招き新潟県知事たらん事の内意を傳へたるに、彼何んと考たるにや貴族院に入るの条件にても望ましき口氣なるに付、好まざれば往かずして可なりと云ひたれば彼れ快諾せり。⁽⁹⁹⁾

1914年4月に安藤は大隈内閣成立により再び休職になった。政友会系の旗印が明瞭だったために、政権交代時には非職、再任を繰り返すこととなったわけである。同年7月に安藤は第七代横浜市長に就任した⁽¹⁰⁰⁾。1918年7月で任期満了になると、11月から1920年12月まで第六代京都市長をつとめた⁽¹⁰¹⁾。1924年7月30日に東京で没。奇しくも市川文吉と同じ命日である。享年71歳。正四位勲二等を授けられた。

8. 安藤とロシア

かくして安藤謙介は、かつてペテルブルグ大学で学んだ法学と行政学の知識を日本で活用したわけだが、他方『フリゲート艦バルラダ号』の邦訳を出版するというゴンチャロフとの約束は、遺憾ながら果たさなかった。この作品中の「日本におけるロシア人」2章からの断片的な日本語訳が初めて発表されたのは1898年10～12月のことであり⁽¹⁰²⁾、これら2章と終章「20年を経て」の全訳は1930年のことである⁽¹⁰³⁾。『フリゲート艦バルラダ号』の完訳はわが国ではまだ出ていない。とどのつまり安藤は、本作品の訳者としては不適当な人物だったといわざるをえない。確かに彼はロシア語がよくできたが、その関心の対象は法律と政治であって、文学ではなかったのである。

但し、彼のために少しばかり弁護しておく。1882年、有栖川宮^{ありすがわのみやたるつと}織仁親王が明治天皇の名代としてアレクサンドル三世の戴冠式に参列した際、ペテルブルグ大学で日本語が教えられていることを知り、同宮家蔵書中の約3500巻を同大学に寄贈した。日本語の授業のことを宮に伝えたのは安藤である⁽¹⁰⁴⁾。この有栖川文庫が糧となつて、後にコンラッド、ネフスキーといった世界的日本学者が輩出した⁽¹⁰⁵⁾。

また安藤は前述のように1904年11月から4年7カ月の間愛媛県知事をつとめた。これは、当時同県松山市の収容所に日露戦争のロシア人俘虜が収容され、ロシア通の安藤が特に任じられたのである⁽¹⁰⁶⁾。彼がロシア通であることはよく知られていた⁽¹⁰⁷⁾。ロシア人俘虜は日本全国29の収容所にのべ7万2408人が収容されたが、そのうち松山収容所はのべ6019人にのぼり、これは当時の松山市の人口の六分の一にあたる⁽¹⁰⁸⁾。1899年、オランダでロシア、日

本を含む約30カ国の間でハーグ条約が採択された。この条約は戦争時の俘虜の人道的取り扱いをうたっており、日露戦争のロシア人俘虜収容は本条約が適用される最初のケースだった。日本国はこの条約を忠実に守り、俘虜を人道的に扱った。このために安藤が知事として起用されたのである。内務大臣から俘虜の取り扱いは日本国の品位を落とさぬようにとの内訓を受けると、安藤は次のような訓告を各方面に発した。

彼ラノ祖国ノタメニ戦ツタ心情ハ、マコトニ同情スベキデアル、ソノ捕虜ノ出入リ通過ニ際シテハ、群衆ガ雑踏シー時的ナ敵愾心ニカラレテ侮辱スルヨウナ言動ガアツテハ、一視同仁ノ天皇陛下ノ御心ニソムクダケデハナク、日本人トシテノ面目ヲケガスコトニナルカラツツシマネバナラヌ⁽¹⁰⁹⁾

ロシア人俘虜は度々慰問を受け、かなりの自由を享受した。彼らは観光に出かけたり、収容所内で靴、錠前製造などの労役に就き、学校を開いて俘虜の士卒が同じ俘虜にロシア語やポーランド語を教えた⁽¹¹⁰⁾。俘虜と日本人女性の間に恋が芽生えることもあった⁽¹¹¹⁾。

最後にゴンチャロフの未刊の書簡の今ひとつの点、即ち作家が「そのご夫人とも知り合いになった日本人公使」⁽¹¹²⁾とは、西徳二郎のことではないだろうか。この書簡は1887年8月に書かれたが、西はその2カ月前に日本公使としてペテルブルグに赴任した。彼にとっては三度目の訪露で、今回は妻子を連れての赴任だった。西は職務の余暇に絵画を学び、劇場や舞踏会をよく訪れ、ロシアの貴顕や朝野の名士、各国公使等と親睦を深め、露都の社交界で信用と徳望を博した。そしてそのような場には常に妻のミネを同行したのである⁽¹¹³⁾。しかしながら、筆者のこの推測を裏付けるような資料は、残念ながら見つかつていない。

本稿執筆に際し、V.I. メーリ尼克（ウリヤーノフスク工科大学）、A.V. ロマーノワ、N.V. カリーニナ（以上サンクト＝ペテルブルグ・プーシキン館）、O.A. デミホフスカヤ（ヤロスラーヴリ）、石垣香津、勝部真長、佐々木照央、ワヂム・シローコフ、外川継男、長縄光男、中村喜和、浜野アーラ、東一郎、宮本立江、渡辺雅司の各氏から貴重なご教示と資料を賜った。また国立国会図書館、埼玉大学図書館、一橋大学図書館、早稲田大学中央図書館で資料の収集を行った。記して感謝の意を表する。

一 注 一

- 1 陰暦弘化4年6月23日。本稿の日付は新暦で統一した。
- 2 後の開成所。1856（安政3）年創立の江戸幕府の洋学・洋式数学教授機関で、東京大学の前身。
- 3 「かねやす」、「かねなり」の読みはともに誤りである。原平三氏講演『市川兼恭』『温知会講演速記録』63、1941年5月、2、3頁。
- 4 原、前掲書、41頁。
- 5 志賀親朋については、拙稿「志賀親朋略伝」（『共同研究 日本とロシア』早稲田大学文学部安井亮平研究室、1987年、39-49頁）を参照されたい。
- 6 復刻版は、山岸光宣編『幕末洋学者欧文集』弘文社、1940年。正確には『友人及び同僚執筆市川文吉送別文集』で、市川兼恭の手になる蘭文表題は「Verzameling van Themas, getiteld

- “Afscheid van den Heer Ytsikawa Bunkitsi” door Vrienden, Mede” genoten, & te Yedo, in het eerste jaar van het Japansche nengoo Keiou (1865)». 原平三「幕末の独逸学と市川兼恭」『史学雑誌』55-8、1944年8月、8ノ95頁。宮永孝「幕末ロシア留学生市川文吉のこと」『社会労働研究』37-4、1991年3月、111頁。
- 7 ロシア語表記は「Богатырь」（「勇士」の意）だろう。
 - 8 日本語表記は「大和夫」で、「大和」は日本の古名である。内藤^{カベウ}遂『遣露伝習生始末』東洋堂、1943年、301頁。
 - 9 内藤、前掲書、40頁。宮永孝「幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料」『社会労働研究』39-4、1993年2月、135、160頁。
 - 10 内藤、前掲書、299頁。
 - 11 ビタリー・グザノフ「橘耕斎とゴシケビチ」『今日のソ連邦』4、1972年2月、31頁。
 - 12 内藤、前掲書、321頁。
 - 13 同上、314頁。
 - 14 スパルヴキン「山内作左衛門の自筆に就て」『明治文化研究』6-2、1930年2月、55-56頁。ロシア語の旧正字法は新正字法に変えて引用した。
 - 15 内藤、前掲書、307、324頁。
 - 16 『森有禮全集』第二巻、宣文堂書店、1972年、24頁。
 - 17 内藤、前掲書、307-308、321頁。
 - 18 Японцы, обучающиеся в русском пансионе // Современная летопись. 1868. № 3. С. 15. -в кн.: Иванова Г.Д. Русские в Японии XIX - начала XX в. М., «Восточная литература», 1993. С. 33-34. これは、サンクト=ペテルブルグ・ロシア科学アカデミー東洋学研究所のイワノワ女史の新発見である。従来、留学生たちのロシア滞在中の事跡に関する史料は少なく、とりわけロシア側の史料は皆無に近かった。古くは内藤遂氏、近年では宮永孝氏の研究のいずれもが、留学生たちはとどのつまりロシアの教育機関で学ぶことはできなかったとしている。内藤、前掲書、43頁。宮永孝『幕末おろしや留学生』筑摩書房、1991年、175頁。
 - 19 内藤、前掲書、246、247、248、261頁。
 - 20 森、前掲書、24頁。森のロシア観については次の論文を参照のこと。外川継男「若き森有礼のロシア観をめぐって」『スラヴ研究』32、1985年3月、73-105頁。
 - 21 内藤、前掲書、325頁。
 - 22 森、前掲書、20頁。
 - 23 内藤、前掲書、304頁。
 - 24 市川の後の東京外国語学校教授時代の教え子鈴木要三郎の証言による。原平三「我が国最初の露国留学生に就いて — 幕末留学生の研究 其一」『歴史学研究』10-6、1940年6月、85-86、88頁。
 - 25 宮永、前掲書、137、170、172頁。
 - 26 西村庚「日本から帰ったプチャーチン提督」『ソ連研究』10-3、1961年3月、23-27頁。
 - 27 1811(文化8)年に高橋景保の建議により設立され、馬場佐十郎と大槻玄澤が初代訳員となった。
 - 28 ロシア暦1854年1月14日、陰暦1853年12月28日付、アニワ港ロシア守備隊長宛。『大日本古文書 幕末外国関係文書之三』東京帝国大学文科大学史料編纂掛、1911年、504-505頁。「会員市川兼恭ノ傳」『東京学士会員雑誌』12-6、1890年7月、274頁。
 - 29 ちなみに高須松亭の養子高須治助は、後に東京外国語学校魯語科に入学して市川文吉からもロシア語を学び、本邦初のロシア小説の訳者、即ちプーシキンの『大尉の娘』の抄訳『露国

- 奇聞 花心蝶思録』(1883年)の訳者として知られることになる。また1894年頃にゴンチャロフの旅行記『フリゲート艦パルラダ号』を初めて日本語に訳出したが、この抄訳は未刊で、その一部のみが『大日本維新史料』第二編之一(明治書院、1939年)と第二編之二(1940年)に収められた。原平三「露和袖珍字彙と編者高須治輔氏の経歴に就て」『学鐙』43-11、1939年11月、9-11頁、柳田泉『明治文学研究 第五卷 明治初期翻訳文学の研究』春秋社、1961年、390-394頁、を参照のこと。
- 30 「会員市川兼恭ノ傳」、280頁。原平三氏講演『市川兼恭』、46-48頁。
- 31 西村、前掲論文、27頁。
- 32 原平三「市川盛三郎」『傳記』9-3・4、1942年4月、19頁。
- 33 前記鈴木要三郎の証言による。原「我が国最初の露国留学生に就いて ― 幕末留学生の研究 其一」、85、88頁。
- 34 Гончаров И.А. Фрегат «Паллада». Очерки путешествия в двух томах. Л., «Наука». 1986. С. 353. 高野明・島田陽共訳『ゴンチャロフ 日本渡航記』雄松堂書店、1969年、435頁。
- 35 古賀謹一郎「西使日記」『大日本古文書 幕末外国関係文書附録之一』所収、1913年、244頁。
- 36 原「我が国最初の露国留学生に就いて ― 幕末留学生の研究 其一」、86頁。ロシア語表記は不明だが、「Шевырева」(シェヴィリョーワ)か。
- 37 原平三「露国留学生派遣の顛末」山岸光宣編『幕末洋学者欧文集解説』所収、弘文荘、1940年、20頁。
- 38 坂本辰之助『男爵西徳二郎傳』非売品、1933年、53頁。
- 39 外川継男「岩倉使節団とロシア」『上智大学外国語学部紀要』23、1989年3月、137頁。『岩倉公実記』中巻、1041頁。「海軍中將松村淳蔵洋行談」森、前掲書所収、383頁。久米邦武編『特命全權大使 米欧回覧実記』(四)、岩波書店、1980年、68、412頁。
- 40 宮永「幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料」、173頁。中村喜和「橘耕斎伝」『一橋論叢』63-4、1970年4月、158頁。
- 41 「はるばるロシアから病篤き父を訪ねて来朝したシウエーロフ氏」『東京日日新聞』、1927年6月12日、第2面。
- 42 『東京外国語学校沿革』東京外国語学校、1932年、48頁。
- 43 『明治七年 掌中官員録 全』西村組商会、1874年10月。『明治初期の官員録・職員録 第二卷 明治四―八年』所収、寺岡書洞、1977年、145頁。
- 44 榎本武揚『シベリヤ日記』南満州鉄道株式会社総裁室弘報課、1939年、289頁。宮永「幕末ロシア留学生市川文吉のこと」、120頁。
- 45 『北方未公開古文書集成 第七卷 千島誌 A.S. ポロンスキー著 榎本武揚他訳』叢文社、1979年、37頁。
- 46 この旅行については、中村喜和「榎本武揚のシベリア紀行」『共同研究 ロシアと日本』第3集所収、一橋大学社会学部中村喜和研究室、1992年、13-23頁、を参照のこと。
- 47 『東京外国語学校一覧 明治十二年十月』、23頁。
- 48 「書目十種 長谷川辰之助」『国民之友』4-48附録、1889年4月、2頁。
- 49 原「露国留学生派遣の顛末」、18頁。
- 50 1878年1月18日付。加茂儀一編『資料 榎本武揚』新人物往来社、1969年、300-301頁。
- 51 原、前掲書、82頁。
- 52 黒田清隆編『環游日記』上編、1887年、1頁。
- 53 西村庚「明治初期の遣露留学生列伝」『ソ連研究』8-11、1959年11月、34頁。中村喜和「日

- 本におけるロシア語辞書の歴史 — 江戸時代から1945年まで」『「窓」別冊 ロシア語の辞書』所収、ナウカ、1980年、75-76頁。
- 54 中村光夫『二葉亭四迷傳』講談社、1958年、52頁。
- 55 原「露国留学生派遣の顛末」、19頁。
- 56 宮永「幕末ロシア留学生市川文吉のこと」、125-127頁。
- 57 原「露国留学生派遣の顛末」、19-20頁。
- 58 Мельник В. Незабываемая «Паллада» // Дальний Восток. № 8. 1984. С. 131-137. 本論文の後半は日本語に翻訳されている。ヴェ・メリニク著、K訳「忘れ得ぬ『パルラーダ』(2) — ゴンチャロフの未刊の手紙から」『ソ連出版文化通信』33-5、1985年5月、8-11頁。
- 59 Санクト=петелбургのロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所「プーシキン館」手稿課所蔵。РО ИРЛИ. № 4904. лл. 143-144 об.
- 60 Смолярчик В.И. А.Ф. Кони и его окружение. М., «Юридическая литература», 1990, С. 168-169; Демиховская Е.К. и Демиховская О.А. (сост.) И.А. Гончаров в кругу современников. Незданная переписка. Псков, Издательство Псковского областного института повышения квалификации работников образования, 1997. С. 16.
- 61 Мельник В.И. Письма И.А. Гончарова к А.Ф. Коню // Симбирский вестник. Вып. II. 1994. С. 61.
- 62 その後この書簡は注60のデミホフスカヤの本の140-141頁に収められた。
- 63 Брокгауз Ф.А. и Ефрон И.А. (изд.) Энциклопедический словарь. Т. IX А. СПб., Типо-литография И.А. Ефрона, 1893. С. 901.
- 64 Брокгауз Ф.А. и Ефрон И.А. (изд.) Новый энциклопедический словарь. Т. 15. СПб., Типография акционерного общества “Брокгауз-Ефрон”. С. 281.
- 65 Лемке М.К. (ред.) М.М. Стасюлевич и его современники в их переписке. Т. IV. СПб., 1912. С. 193; Алексеев А.Д. Летопись жизни и творчества И.А. Гончарова. М.-Л., АН СССР. 1960. С. 283, 286; Демиховская Е.К. и Демиховская О.А. (сост.) Указ. соч. С. 128-129, 130, 132, 140, 141.
- 66 Демиховская Е.К. и Демиховская О.А. (сост.) Указ. соч. С. 142, 309; Алексеев. Указ. соч. С. 285.
- 67 Кони А.Ф. Иван Александрович Гончаров. - в кн.: И.А. Гончаров в воспоминаниях современников. Л., «Художественная литература», 1969. С. 256-257.
- 68 Мельник. Незабываемая «Паллада». С. 137.
- 69 寺石正路『土佐偉人傳』歴史図書社、1976年、536頁。
- 70 安藤謙介「舊語学校回顧談」『校友会雑誌』外国語学校校友会、1910年12月、9-12頁。『東京外国語学校官員並生徒一覽』、1874年3月、26頁。
- 71 大日本人名辭書刊行會編『大日本人名辭書 (一)』講談社、1980年、110頁。
- 72 他に10回「安藤謙介」という名が出てくるが、これは別人物とみなしておく。
- 73 『勝海舟全集 20 海舟日記 III』勁草書房、1973年、36頁。
- 74 同上、50、51頁。
- 75 神崎正誼編纂『明治十年十一月 官員名鑑 全』山口安兵衛他発行。『明治初期の官員録・職員録 第三卷 明治九—十二年』所収、1977年、138頁。
- 76 『勝海舟全集 20 海舟日記 III』、63頁。
- 77 同上、178頁。
- 78 彦根正三編纂『明治十三年十月改正 官員録』博公書院。『明治初期の官員録・職員録 第四卷 明治十三—十五年』所収、1979年、36頁。彦根正三編纂『明治十六年十二月改正 官員録』博公書院。『明治初期の官員録・職員録 第五卷 明治十六—十七年』所収、1980年、29

- 頁。『職員録（甲）』内閣官報局、1886年12月、28頁。但しレンセン氏のリストでは、安藤は1877 - 1879年にコルサコフ領事館で「書記一等見習」、1881年にペテルブルグ公使館で「三等書記生」、1885年には「書記生」となっている。G.A. Lensen, *Japanese Diplomatic and Consular Officials in Russia*, Tokyo, Sophia University, 1968, pp. 14, 87, 169-171.
- 79 Биографический словарь профессоров и преподавателей Императорского С.-Петербургского университета за истекшую третью четверть века его существования. 1869-1894. Т. I. СПб., Типография и литография Б. М. Вольфа, 1896. С. 15.
- 80 西村庚「レニングラード大学の日本人講師」『文献』6、1961年12月、14頁。西村庚「レニングラードにのこる日本人講師の伝統」『窓』10-5、1964年5月、2-3頁。
- 81 Биографический словарь профессоров и преподавателей Императорского С.-Петербургского университета за истекшую третью четверть века его существования. 1869-1894. Т. I. С. 15-16.
- 82 『勝海舟全集 2 1 海舟日記 IV ほか』、1973年、108頁。
- 83 同上、112、121、122、124、126、128、129、149、162、165、345、461、463、465、474、599、655、656、658頁。
- 84 同上、225、229頁。
- 85 「「閔妃暗殺」報告書を発見」『毎日新聞』、1995年6月17日。「閔妃暗殺に目撃手記」『朝日新聞』、1995年6月20日。
- 86 『明治人名辞典』下巻、日本図書センター、1987年、ア37頁。
- 87 『日本の歴代知事』第二巻（上）、歴代知事編纂会、1981年、132頁。
- 88 『千葉県史 明治編』千葉県、1962年、687頁。『日本の歴代知事』第一巻、1980年、801頁。
- 89 大日本人名辞書刊行会編『大日本人名辞書（一）』、110頁。
- 90 「日露協会紀事」『黒龍』17、1902年10月、62-63頁。
- 91 「日露協会計畫」『東京経済雑誌』1142、1902年7月26日、28頁。
- 92 「日露協会記事」『黒龍』16、1902年9月、63頁。「日露協会報告」『黒龍』18、1902年11月、69頁。
- 93 『富山県史 通史編 V 近代上』富山県、1981年、531、532頁。
- 94 『日本の歴代知事』第三巻（上）、1982年、588頁。『愛媛県史 人物』愛媛県、1989年、32-33頁。
- 95 大日本人名辞書刊行会編『大日本人名辞書（一）』、110頁。
- 96 『日本の歴代知事』第三巻（下）、1982年、149頁。『長崎県大百科事典』長崎新聞社、1984年、899、960頁。
- 97 『原敬日記』第四巻、乾元社、1951年、346頁。
- 98 『日本の歴代知事』第一巻、982頁。『新潟県史 通史編 7 近代二』新潟県、1988年、445-446、549、593-594頁。
- 99 『原敬日記』第五巻、1951年、207頁。
- 100 『横浜市史』第五巻上、横浜市、1971年、59頁。『日本の歴代市長』第一巻、歴代知事編纂会、1983年、1039頁。
- 101 『日本の歴代市長』第二巻、1984年、711頁。
- 102 漁舟生「西眼に映せる嘉永年間の日本」『帝国文学』4-10-46、1898年10月、70-82頁。4-11-47、1898年11月、89-95頁。4-12-48、1898年12月、94-99頁。
- 103 平岡雅英訳『日本旅行記』ロシア問題研究所、1930年。

- 104 *Иванова. Указ. соч.* С. 13. 有栖川宮に図書寄贈を進言したのは西徳二郎であり、安藤は寄贈図書の整理と目録の作成にあたった、とする説もある。桜井良平「明治のロシア語 その基礎を築いた人々〈第三回〉安藤謙介」『日本とソビエト』752、1975年6月1日、3面。
- 105 保田孝一「三笠宮文庫の誕生 日ソ交流の伝統に新しい血」『朝日新聞』、1978年2月24日。
- 106 寺石、前掲書、536頁。
- 107 例えば、新渡戸稲造「教育の目的」『明治文学全集 88 明治宗教文学集（二）』所収、筑摩書房、1975年、233頁。
- 108 『愛媛県史 県政』愛媛県、1988年、198頁。檜山真一「日露戦争 — ニコライ・ラッセルと日本」ロシア史研究会編『日露二〇〇年 — 隣国ロシアとの交流史』所収、彩流社、1993年、126頁。
- 109 才神時雄『松山収容所 捕虜と日本人』中央公論社、1969年、29頁。
- 110 同上、40-42、60-78、97-105頁。『愛媛県史 県政』、199-200頁。また次の文献を参照のこと。才神時雄『ロシア人捕虜の記録』新時代社、1973年。F. クプチンスキー著、小田川研二訳『松山捕虜収容所日記 ロシア将校の見た明治日本』中央公論社、1988年。ソフィア・フォン・タイル著、小木曾龍・小木曾美代子訳『日露戦争下の日本 ロシア軍人捕虜の妻の日記』新人物往来社、1991年。
- 111 例えば次の文献を参照のこと。Рейнгард Ф.Ф. Мало прожито - много пережито. Впечатления молодого офицера о войне и плене. СПб., 1907. 邦訳は、レンガート、才神時雄編著『旅順・松山の歌』新時代社、1974年。
- 112 注59を参照。
- 113 坂本、前掲書、77、118頁。

И.А. Гончаров и его знакомые японцы в Петербурге

Кадзухико САВАДА

В предлагаемой статье я хочу рассказать о двух японцах, с которыми И.А. Гончаров был знаком и поддерживал дружбу в Петербурге.

Первый из них - ИТИКАВА Бункити родился 3-го августа 1847 года по новому стилю в Эдо (старое название Токио) и был старшим сыном в семье Итикава Канэнори, будущего профессора - германиста в Кайсэйдзё (учебное заведение европейского типа, созданное сёгунатом Токугава в 1857 году). В 1865 году правительство сёгуната, приняв предложение российского консула в г. Хакодате на Хоккайдо И.А. Гошкевича, решило отправить студентов на учебу в Россию. Были отобраны шесть человек. Из них пять - сыновья вассалов сёгуна в возрасте от 12 до 21 года. Эти юноши обучались в Кайсэйдзё и были непосредственно подчинены сёгуну, а один - чиновник ЯМАНОУТИ Сакудзаэмон из г. Хакодате. В числе первых пяти и был Итикава Бункити. В то время в Кайсэйдзё существовало отделение русистики, но преподавателей еще не было. По всей вероятности, Канэнори хотел определить своего сына на должность преподавателя.

16-го сентября 1865 года студенты отплыли из порта Хакодате на российском судне «Богатырь» и добрались до Петербурга 1-го апреля 1866 года. Со дня отъезда из Хакодате прошло 214 дней.

Студенты пришли в азиатский департамент министерства иностранных дел России и застали там японца по имени ТАТИБАНА Косай. Как известно, в 1854 году

корабль «Диана», на котором адмирал Е.В. Путятин прибыл в Симода на полуострове Идзу, был разбит во время цунами и затонул. С помощью японцев русские моряки в деревне Хэда на Идзу построили шхуну «Хэда», на которой Путятин вернулся на родину. А Татибана вместе с Гошкевичем на прусском торговом судне «Грета» тайно выехал из Японии и приехал в Россию. Русское имя Татибаны - Владимир Иосифович Яматов (Ямато - древнее название Японии). По рекомендации Гошкевича он поступил на службу в азиатский департамент министерства иностранных дел России как переводчик. Не исключено, что он был знаком с Гончаровым, но материалы, подтверждающие это мое предположение, пока не найдены.

У Гошкевича и Татибаны японские студенты обучались русскому языку. Они жили вместе в арендованном доме, куда приходил Гошкевич для преподавания русского языка. Однако эти визиты были не регулярны и занятия не систематические. Видимо, опека Гошкевича оставляла желать лучшего. Недавно в России найдена журнальная заметка, в которой говорится о том, что японцы три года обучались в Петербурге в мужском пансионе и готовились для поступления в специальные учебные заведения.

Однако их мечта о поступлении в русские специальные учебные заведения не осуществилась, поскольку двое из них были слишком молоды и кроме того, все студенты не достаточно владели русским языком, чтобы понимать лекции по-русски. В 1867 году болезненный Яманоути вернулся домой, а в следующем году одновременно с падением правительства сёгуната за ним последовали еще четыре человека. Таким образом командировка японских студентов в Россию оказалась почти безрезультатной.

Однако Итикава Бункити остался в Петербурге и, по рассказам СУДЗУКИ Ёдзобуро, будущего своего ученика в Токийской школе иностранных языков, Путятин взял его к себе на попечение. Путятин был знаком с отцом Бункити - Итикава Канэнори. В 1853 году, когда русский посол прибыл в Нагасаки, Итикава Канэнори работал переводчиком в Эдо в астрономической обсерватории и перевел с голландского языка на японский письмо Путятина. Также в 1858 году, когда Путятин прибыл на корабле «Аскольд» в порт Канагава для заключения русско-японского торгового договора, Канэнори сопровождал японскую делегацию и посещал русское судно. Будучи знакомым с Канэнори, Путятин, по всей вероятности, оказал покровительство и его сыну.

Итикава, по словам уже упомянутого Судзуки, обучался русскому языку, истории и математике у Гончарова и трех других русских. С писателем Итикаву познакомил, по всей вероятности, Путятин или Гошкевич.

В противоположность Яманоути Итикава питал к России симпатию. Он бывал в светском кругу и вступил в гражданский брак с русской женщиной по фамилии Шевырева [или Швилева]. В 1870 году у них родился ребенок: Александр Васильевич Шевырев [или Швилев], который впоследствии стал дипломатом и служил генеральным консулом в Афганистане и в Персии. В 1869 году японское новое правительство Мэйдзи, сменившее правительство сёгуната, утвердило Итикаву студентом, отправленным министерством иностранных дел в Россию.

В 1873 году Итикава вернулся в Японию. По приезде он начал преподавать на отделении русского языка в Токийской школе иностранных языков, основанной как раз в 1873 году. Т. е. цель его поездки в Россию, по крайней мере цель его отца, была достигнута. В 1873 же году Итикава женился на японке. А в следующем году он был назначен на должность второго секретаря министерства иностранных дел Японии и сопровождал чрезвычайного и полномочного посла Японии ЭНОМОТО Такэаки в Петербург. Там Итикава как переводчик принимал участие в переговорах по поводу русско-японского договора об обмене Сахалина на Курильские острова, который был заключен в 1875 году. Во время пребывания в Петербурге, по всей вероятности, Итикава встречался с матерью и сыном Шевыревыми [или Швилевыми].

В 1879 году в Японии Итикава снова вернулся к преподаванию в Токийской школе иностранных языков. Он был учителем студента Фтабатэя Симэя, который впоследствии познакомил японских читателей с произведениями Гончарова. Какая счастливая игра случая! Поскольку одной из любимых книг Фтабатэя был «Обрыв», то он, должно быть, слышал от Итикавы о русском писателе. Но, по воспоминаниям Судзуки, Итикава из-за долгого пребывания в России забыл японский язык, а что касается русского, то зная язык, он был плохо знаком с литературой. Например, общаясь с Гончаровым, он никогда не читал «Обломова».

В 1885 году Токийская школа иностранных языков была закрыта. Итикава оставил надежды на официальную карьеру и прожил последние 40 лет своей жизни в уединении на полуострове Идзу. Он материально поддерживал своего русского сына. Тот впоследствии два раза приезжал в Японию и виделся с отцом. Итикава близко общался с Татибана Косай, который вернулся в Японию в 1874 году, и щедро оказывал ему всевозможную помощь. Итикава умер 30-го июля 1927 года в возрасте 81 года.

В 1984 году один из ведущих российских гончароведов В.И. Мельник опубликовал статью «Незабываемая “Паллада”». Во второй половине статьи автор касается отношений Гончарова с японским полномочным КАВАДЗИ Тосиакира, постоянного интереса писателя к стране восходящего солнца и японцев, которые могли бы быть знакомы с ним. Там профессор Мельник знакомит читателей с неопубликованным письмом Гончарова к А.Ф. Кони от 14-го августа 1887 года, и устанавливает тот факт, что японец по имени «Андо» общался с писателем.

Секретарь Гончаровской группы в Пушкинском доме госпожа А.В. Федорова любезно послала мне копию этого письма, которое далее цитирую. Письмо было отправлено из Гунгербурга (Усть-Наровы), где Гончаров отдыхал летом 1887 года.

«Японских посланников я знал всех, какие у нас были, и даже познакомился с женою одного из них - все это у Посыета. Один из посольства, Андо-сан (г-н Андо - по-нашему), говорящий отлично, изящно, со всеми утонченностями языка, по-русски, уезжая на год в Японию, взял с собой «Фрегат “Паллада”», для перевода на японский язык. Конечно - я с радостью приду к Вам познакомиться с японцем.»

В конце своей статьи профессор В. И. Мельник задает вопрос:

«Кто же был этот Андо-сан, взявшийся за перевод, но по каким-то причинам его не выполнивший? Этот вопрос остается пока без ответа.»

Ниже я попытаюсь ответить на этот вопрос.

«Андо-сан», т.е. АНДО Кэнсукэ родился 1-го января 1854 года в семье самурая княжества Тоса (старое название префектуры Коти). В 1872 году Андо приехал в Токио и начал изучать русский язык в Православной духовной семинарии. В 1874 году он стал студентом отделения русского языка в Токийской школе иностранных языков, но в следующем году, после ссоры с директором и членами правления школы был исключен из школы.

В 1876 году Андо поступил на работу в министерство иностранных дел Японии и был командирован на Сахалин в японское консульство в Корсакове в качестве стажера. В 1878 году началась его служба в японском посольстве в Петербурге. Русским языком он владел великолепно, и одновременно с работой в посольстве в качестве вольнослушателя посещал лекции по политике и правоведению в Петербургском университете. С 1881 года до конца 1884 года в качестве вольнонаемного преподавателя безвозмездно читал японский язык и упражнял студентов в китайской каллиграфии на факультете восточных языков Петербургского университета, за что и был награжден орденом Станислава 2-й степени.

Почему Гончаров в своем письме к Кони, знаменитому юристу, упомянул об Андо?

По всей вероятности, одна из причин состоит в том, что писатель был осведомлен о профессиональной специализации японца.

В 1885 году Андо возвратился в Японию. А в 1887 году он стал прокурором министерства юстиции и служил в судах в городах Нагоя и Гифу. С 1891 года Андо служил старшим прокурором в окружных судах городов Маэбаси, Кумамото и Ёкохама. С 1896 года он был губернатором префектур Тояма, Тиба, Эхимэ, Нагасаки и Нийгата, а затем - мэром городов Ёкохама и Киото. В 1903 году Андо был избран в палату представителей - нижнюю палату японского парламента.

В 1902 году в Токио было создано «Японско-русское общество». Цель общества состояла в том, чтобы стремиться к лучшему взаимопониманию между Японией и Россией и процветанию японо-русской торговли в критический момент перед началом Русско-японской войны. Президентом общества был Энмото Такэаки, а Андо - одним из консультантов.

Андо умер 30-го июля 1924 года в Токио в возрасте 71 года.

К сожалению, Андо не исполнил обещание, данное Гончарову, перевести «Фрегат “Паллада”» на японский язык. Он отлично владел русским языком, но его интересовали право и политика, а не литература.

Еще одна деталь: в 1882 году японский принц АРИСУГАВА-НО-МИЯ Тарухито для присутствия на церемонии коронации Александра III посетил Петербург, и узнав о занятиях русских студентов японским языком в Петербургском университете, преподнес университету примерно 3,500 экземпляров японских книг из своей библиотеки. О занятиях японским языком принцу рассказал Андо. На основе этой библиотеки Арисугавы факультет восточных языков Петербургского университета выпустил таких японоведов всемирного значения, как Н.И. Конрад и Н.А. Невский.

С ноября 1904 года Андо служил губернатором префектуры Эхимэ на острове Сикоку. В то время шла Русско-японская война. В 29 лагерях по всей Японии находились русские военнопленные. Их общее число составляло 72,408 человек. Самый большой лагерь был в городе Мацуяма (префектура Эхимэ) - в нем содержалось 6,019 военнопленных. В 1899 году в Гааге в Нидерландах был заключен международный договор, который подписали и Россия, и Япония. Договор требовал гуманного обращения с военнопленными во время войны. Япония соблюдала договор добросовестно. С этой целью и Андо, знаток России, был назначен на должность губернатора префектуры Эхимэ.

Японцы часто навещали русских военнопленных. Военнопленные пользовались значительной свободой: они отправлялись на экскурсии, занимались обувным и скобяным ремеслами, преподавали друг другу русский и польский языки в школе, открытой в лагере. Даже зарождалась любовь между военнопленными и японскими девушками.